

48 で4倍体である。若枝の伸びない型のものは北アメリカから記録され、カナダ、アラスカ、カムチャツカ、東シベリア、千島、樺太に分布する var. *alpinum* Bigelow に相当すると考えられる。これは2倍体との報告があるから、日本のものもその可能性が高い。

Two varieties are recognized in *Vaccinium uliginosum* L. of Japan. The first is ascribed to var. *alpinum* Bigelow and distributed in Hokkaido and alpine regions in northern to central Honshu. The second occurs in high mountain regions of northern to central Honshu

and should be treated as a new variety.

Vaccinium uliginosum L. var. *japonicum* Yamazaki, var. nov.

Flores in axillis foliorum juvenium solitarii.

Typus. Pref. Nagano, Mt. Asama, Minenochiyaya (Ohwi et Okamoto, Jul. 17, 1958, no. 1793, TI).

Distr. Japan : C. to N. Honshu.

This variety differs from the typical form by the 2–3 flowers forming a leafy short raceme on a current year's shoot.

(東京大学理学部附属植物園)

□眞砂久哉さんと紀州のナチュラルリストたち Hisaya Manago (1930–1989) and Some Naturalists of Kii Peninsula, Central Japan

眞砂久哉 (まなごひさや) さんの生涯——眞砂さんの家は江戸時代から木炭、特に備長炭 (びんちょうずみ) を扱っていた。備長炭はウバメガシを材料とした紀州特産の良質の木炭で、元禄年間に田辺の人、備長屋長右衛門の創製したものといわれている。備長炭は蒲焼、焼肉料理に適し、眞砂商店ではこれを主として東京に出荷していた。眞砂商店は田辺市新庄町にあり、屋号は今久 (いまきゅう) という。今出屋の久助が主家から別れたからである。家をつぐ長男の名には久の一字を加えるので、久哉さんの父上の名は久一 (きゅういち) である。昭和30年代になると灯油やプロパンガスが木炭にとって代る時代となり、彼の家も林業を主体とせざるを得なくなった。久一氏が岐阜県高山市の営林署に勤務していたとき、久哉さんは生れた。

久哉さんは昭和22年県立田辺中学校を卒業し、同年京都の同志社大学予科に入学、大学は文学部で心理学を学び、27年3月卒業とともに家業をつぐため、東京深川の木炭問屋へ奉公した。2年後に帰宅して家業をつぎ、30年4月、京都大学農学部林学科大学院の聴講生となり、同年山本あけみさんと結婚し、京都で家庭を持ったが、31年3月田辺の家に帰った。昭和45年のはじめ、今の中屋敷町に新築して移った。長男の久晃さん

は英文学者、次男の俊哉さんは西牟婁郡県事務所林務課に勤め、家をついでおられる。

久哉さんは紀州の林業に力を入れ、紀州林業懇話会事務局長をはじめ、国や県の林業団体、地元林業組合などでいろいろの役職について活躍した。その一方、田辺市の文化事業に尽くし、田辺市文化財審議委員、田辺市史編纂委員、田辺市立図書館協議会委員などをつとめた。そして誰からも愛された。同志社ではグリークラブで唱っていたが、田辺の音楽界にも力を入れた。多屋平夫氏が「自然を大切にすると」を結成すると、すぐその活動に賛同して中小屋谷の原始林を歩き、「熊野古道を歩く会」では世話役となり、歩けなくなった会員を背負って山を下ったこともあった。

和歌山県は山が深く、南国でもあるので、そこに豊富なシダ植物に彼の興味は集中し、県の南部の山や谷はすべて彼の足跡を印するところとなった。日本シダの会の会員だったが、1975年には6名の発起人で「紀州シダの会」を創立し、6月末には入会希望者が26名に達し、翌年の2月7日に新宮市で発会、眞砂さんは会長として毎月のように会員と共に熱心に各地に採集した。シダの種の判定に疑問があると、京都の田川基二氏 (1908–1977) や東京の倉田悟氏 (1922–1978) 等に質問し、両氏亡きあとには大阪の瀬戸剛氏、東京の中池敏之氏に同定をたのんでいた。材料を提供してシダ学者の研究も助けた。

眞砂さんの採集した標本は16000点を超え、そ

のうち8割は和歌山県産、他はパプア・ニューギニア、スマトラ、台湾で採集したものである。彼の目標は「和歌山県シダ植物誌」(仮題)の完成であり、それはすでに原稿にまとまっているので、近いうちに出版されて、彼のライフワークが世に出ることを切望する。

眞砂さんは平素健康に恵まれていたように思う。しかし1988年4月から食欲がなくなり、市内の紀南病院で検査したときはすでに手おくれの胃がんと診断された。本人には胃かいようとのみ告げられた。4月24日和歌山県生物同好会で、南方熊楠に関する講演をした。5月中旬に手術、約1ヶ月で退院して自宅で静養したが、10月に入ると体の不調を訴え再入院、その後、入退院をくりかえしたが、彼の研究意欲は衰えることはなかった。平成元年(1989)2月に「菅江眞澄と玉置香風との出会い」を締切に間にあわせて執筆、ついで日本シダの会会報に「南方熊楠が那智山附近で採集したシダ植物」を書きはじめ、3月4日に脱稿した。

彼は最後の力をふりしぼって田辺市発行『市史』自然篇と植物相(シダ植物)の約束の原稿を書きあげた。それが絶筆となった。原稿を書くことがいちばん気が楽になるといって、本人は寝たまま執筆を続けたのである。1989年5月26日、彼は自宅で59歳の人生を閉じた。

眞砂さんの死を知ったのは、たぶん八坂書房の主人からだった。八坂では『南方熊楠日記』を出版したので、田辺の事情をよく知っていたからと思う。筆者はせめて眞砂さんのお墓まいりでもしたく思った。昨年10月24日に田辺を訪れ、あけみ夫人の御出迎えをうけて、お宅の仏壇の御位牌の前に手をあわすことができた。

眞砂久哉さんの畔田翠山研究——畔田翠山伴存(くろだすいざんともあり)(1792-1859)は江戸時代末期の最高の本草家、ナチュラリストである。小野蘭山(1862-1932)の弟子に紀州の本草家、小原桃洞良貴(よししたか、1746-1824)がおり、その弟子が翠山である。伊藤篤太郎博士(1865-1941)は雑誌「太陽」(1913)に、「隠れたる博物学者、畔田翠山」を書いて、ほとんど世に埋もれていた翠山を紹介した。白井光太郎博士(1862-

1932)は『岩波生物学講座』に「支那および日本本草学の沿革および本草家の伝記」(1934)(白井光太郎著作集I、1985に再収)を終るにあたり、「徳川時代掉尾の本草大家」として翠山一人をあげてくわしく伝記を記した。かつて田辺高等女学校に奉職して博物学を教え、後に大阪に移り住んだ宇井縫三氏(1878-1946)の『紀州植物誌』にはもちろん翠山を紹介している。上野益三博士も翠山について多くの研究を残された。また翠山の『古名録』を1978年に再出版された杉本つとむ氏の書かれたものがある。最も詳しい伝記は、和歌山県の文化人、山口藤次郎氏が和歌山市から出版した『贈従五位畔田翠山翁伝』(1932)である。翠山の著作の刊本は『紫藤園攷證、甲集』(1845)のみであったが、田中芳男が翠山の名著が埋れることを惜しみ、大部の『古名録』(1889)と『水族志』(1884)を出版した。

紀州のシダを調べ、紀州各地を採集旅行してまわる眞砂さんにとって、紀州の山々をめぐる畔田翠山に対する愛着と興味は当然おこり、翠山についての研究が、シダの研究と平行した。幸いに宇井縫三氏が翠山の著作の写本をつくり、これは没後に田辺市立図書館に残された。田辺市文化財審議会委員であり、田辺市立図書館協議会委員である眞砂さんは、宇井縫三氏が写された『熊野物産初志』の出版を真剣に考えた。大阪図書館にある翠山の原本と対比するため、眞砂さんは大阪に何度も足を運び、苦心校訂された。出版は1980年に見事になされた。

紀州の生物誌にもっとも関係ある翠山の三部作は「野山草木誌」(のやまそうもくし)「紀南六郡志」「熊野物産初志」である。この三部作について眞砂さんはこれらの書に引用された文献をしらべるため、大阪の杏雨書屋所有の紀州関係蔵書の目録をつくり、それらの書を研究して出版を念願された。『熊野物産初志』(187頁)は印刷されたが、他の二書は未刊行に終わった。来年の1992年は翠山の生誕二百年を迎えるが、これを期していろいろと考えておられた眞砂さんが亡くなられたのは真に残念である。

熊野は紀伊半島南部一帯で、和歌山県、三重県、奈良県にまたがる。山深く、木材の産地である。

紀の国はすなわち木の国である。古くから本宮、新宮、那智の熊野三山に詣でる熊野詣は田辺から山に入る。田辺市の紀南文化財研究会の機関誌「くちくまの」は熊野の口である田辺を意味するという。この機関誌に眞砂さんは多く寄稿している。

眞砂久哉さんとののかかわり——昭和55年11月30日発行と奥付に記されてある『熊野物産初志』が贈られてきた。昭和56年2月25日付の眞砂久哉さんの手紙の冒頭に「私は和歌山県で林業を営んでいる者ですが、紀州の本草学に関心を持っていますので、先生の著書『日本自然誌の成立』とこのたび刊行されました『シーボルトと日本の植物』を拝読して大変参考になりました。同封しました畔田翠山『熊野物産初志』は上野益三先生のお世話になり出版したものです……」と自己紹介があった。

畔田翠山とその著作については今後も眞砂さんの研究にまつことであり、多くの期待をもった。贈られた『熊野物産初志』は本誌56巻96頁(1981)に新刊として紹介したが、表題が簡略化されて『熊野産物誌』となっている。

その後たびたび眞砂さんは畔田翠山やシダの研究の別刷を送って下さった。安田健さんが盛永俊太郎氏と共編で『享保元文諸国産物帳集成』を昭和60年以降、科学書院から刊行されているので、第6巻の紀伊の部では眞砂さんに解説を頼むよう科学書院主人加藤敏雄氏に話した。科学書院には『白井光太郎著作集』の編集を頼まれていた。白井光太郎著『本草学論攷』が春陽堂から出版されていたが、第五巻は未刊だったし4巻本も市場から姿を消していた。これら論文を分野別に分けて5巻とし『白井光太郎著作集』として再編集することにした。

考えるに白井先生を継いだ東大農学部の猪熊泰三氏はこの仕事に最適だが、既に亡くなられている。後をついだ倉田悟氏も既に亡い。それで現在の浜谷稔夫教授にお願いしたが、科学史の研究者の筆者の方が適任といわれる。それで筆者は白井先生の御長男で『本草学論攷』に関係された白井秀雄さんを尋ね、結局この仕事をお引き受けした。秀雄さんが後に白井文書を托された国会図書館に

は、白井先生の手紙が未整理で残っていたので、その一部を第6巻として加えることにした。『南方熊楠全集』(1975-79)には白井光太郎への南方熊楠の手紙が6通も掲載されている。白井秀雄さんが南方からの手紙を出版社に提供されたためである。それなら南方への白井光太郎の手紙がもし南方家に残っていれば、それを第6巻に入れたと考えた。このために南方家を訪ねることを思い立ったが、南方さんを直接知らない筆者は、同じ田辺に住む眞砂さんに手紙して紹介をお願いした。

昭和59年に筆者夫妻ははじめて田辺を訪れ、眞砂久哉さんに会った。昼食を寿司屋で御馳走になった後、中屋敷の南方邸に向った。そして長女の南方文枝さんにお会いでき、書庫や庭を拝見した。書庫には内外の図書が満ちていた。しかし文枝さんによると白井先生の手紙は残っていないということだった。

眞砂さんとの南方邸訪問の後、邸前の紀伊民報社の事務所に立ち寄り、代表取締役の小山周次郎氏に会った。紀伊民報社には紀南文化財研究会の事務所がおかれ、先に記した『熊野物産初志』の出版所でもあった。筆者は南方熊楠邸の保存を田辺市としてなすべきだと説き、眞砂さんも口をそろえて下さったが、田辺にはこれという産業が今ではなく、経済的に困難といわれた。すぐ近くの同じ町内の眞砂さん宅にお寄りして、あけみ夫人に三宝柑の御馳走になった。眞砂さんは自動車を運転して白浜の宿まで私達を送りとどける途中、白浜の南方記念館にも連れて行って下さった。かつて高校の同窓、白浜臨海実験所長時田隆教授を白浜に訪ねた際に見ていたので南方記念館は二度目だったが、昔にくらべ内容は充実していた。

1987年の上野益三博士記念会でおみかけした以外は、眞砂さんとはたった一度、たった一日の会見だったが、その人を魅する笑顔と心からの親切が忘れられない。この温顔は彼に接する誰にも向けられていたものと思われる。

南方熊楠(みなかたたくまぐす, 1867-1938)についての聞き書き——明治33年帰朝した南方は翌年勝浦へ行き、那智にはしばしば行った。明治35年5月からその年中、田辺や白浜に滞在した。

田辺では林業で産をなした多屋寿平次の別宅にしばしばとまった。このとき多屋の息子3人たちと酒を酌みかわし、親友となった。19才の次女の高は熊楠を好きになり、その後那智にこもった孤独の熊楠も彼女に慕情をよせた。(長谷川興蔵、多屋たか南方熊楠往復書簡「くちくまの」(83): 131-144. 1990)。熊楠の初恋の人といわれる高は、後に京都帝国大学院学生だった脇村民次郎と結婚した。民次郎の実兄市太郎氏(財団法人脇村奨学会設立者)の長女すゑさんは山本家に嫁し、その長女のあけみさんは眞砂久哉さんに嫁した。

明治37年、南方熊楠は那智を去り、和歌山中学の旧友、眼科医の喜多福武三郎を尋ね、田辺町に借家を求めて住みつき、40才の彼は喜多福のすすめで闘鶏(とりあわせ)神社の神主の田村宗造の四女、28才の松枝と結婚、1911年長女の文枝さんが生まれた。熊楠は1916年田辺に永住をきめ、50才の彼は4月に中屋敷に約380坪の地を求めて、ここに終生住まった。南方熊楠の亡くなったのは旧友喜多福武三郎の亡くなった昭和13年3月から間もない12月29日で、75才だった。眞砂さんの8歳のときのことである。

筆者が眞砂さんと共に南方邸を訪れたとき、南方文枝さんにきいた父上熊楠翁の話をつぎに書く。筆者には他に書く機会がないと思うからである。

「熊楠は自分の気持ちのいらだたしさを静めるため、粘菌を研究した」。

「6月頃は粘菌のシーズンでいそがしく、御飯も食べず蚊にさされても知らずにいるほどの熱中ぶりで、そのため彼のまわりには、血でふくれて体から落ちた蚊が掃くほどあった」。

「風呂屋に行って湯から出ると、自分の今まで着ていた着物がわからず、他人のものを着てくる。だから縞の着物で行って、格子縞の着物で帰ってくる始末。風呂屋の衣服入れのいろはにほへとをおぼえているが、その次の番号をおぼえていず、番台のおかみさんに聞く『ごっさん私の着物は何番だったかね』」。

「下駄に焼印を押しておいても他人のをはいてくる。彼は下駄は重い方が好きで、別あつらえで重い木で作らせた。重くないところぶという」。

「平瀬作五郎さんが家に来て、二人でマツバラ

ンの発生の研究をしたが成功しなかった。マツバランは庭に自生していた。(眞砂さんの家でも生えているという)」。

「平瀬さんは一週間ぐらい二階に滞在していた。文枝さんが10才くらいでハシカにかかり、顔が真赤だった。平瀬さんは赤ん坊と思われたのか、あとでよだれかけを送ってきた」。

「熊楠は子供に対してうるさいほど気をつかった。文枝さんが花を習いにいくと、もう帰ったか、帰ったかと心配して門に立っていた」。

「彼は母(奥さん)とは12違いであった」。

「県がつくってくれた彼の肖像画は、彼の気にいらなかった。部屋にかけのをいやがり、押入にしまいこんだ。眼に光がないからだろうと、文枝さんは言う。彼は肖像写真の方を好んだ」。

眞砂久哉さんの著作

(シダ研究関係を除き、本稿関係のみ)

- 1969. 餅つき。くちくまの4号。
- 1972. 戦時下の田辺——勤労動員の想い出。くちくまの16号。
- 1973. 眞砂について。くちくまの19号。
- 1973. 宇井縫蔵先生のシダ標本を見る。南紀生物15(1): 13-14。
- 1975. 畔田伴存(紀州が生んだ偉大な博物学者)。土(53): 44-45。
- 1975. 畔田伴存及びシダと大塔山。土(53): 47-48。
- 1978. ヤマアイ(山藍)の自生地を訪ねて。くちくまの36号。
- 1979. 紀州藩の本草家畔田翠山と「熊野物産初志」。くちくまの40号。
- 1980. 熊野 大塔山——消えゆく神秘的な自然。くちくまの47号。
- 1980. 畔田翠山『熊野物産初志』。紀南文化財研究会編集発行、眞砂久哉校訂。(あとがきによる)
- 1981. 熊野物産初志を翻刻して。くちくまの47号。
- 1981. 熊野物産初志に引用された文献について。くちくまの48号。
- 1981. 畔田翠山の野山草木通志について。南紀生物23(2): 77-80。

1981. 畔田翠山と南方熊楠. 随筆誌「土」
1981. 「紀伊続風土記」物産の部について. くちくまの 50 号.
1982. 畔田翠山の「野山草木通志」「紀南六郡志」に引用された文献について. くちくまの 52 号.
1982. 畔田翠山の「紀南六郡志」について. 南紀生物 24 (1): 31-35.
1982. 原田一夫「紀州介品諸録」の付記. 田辺文化財 (25): 46-47.
1983. 杏雨書屋の紀州関係蔵書目録付, 畔田翠山の本草書紀州三部作に引用された文献解題補遺. くちくまの 55 号.
1984. 備長炭と炭素繊維. くちくまの 58 号.
1985. 南方熊楠と病跡学. くちくまの 62 号.
1985. 岩瀬文庫の紀州関係本草書・博物学書. くちくまの 63 号.
1986. 図書紹介・鶴見和子「殺されたもののゆくえ」——私の民族学ノート. くちくまの 65 号.
1986. 紀州藩の本草家, 畔田翠山の業績. きのくに文化財 (19): 23-29.
1987. “南方熊楠外伝”を読んで——宮武省三・里見八犬伝・コノテガシワ. くちくまの 68 号.
1987. 由良町^{あしか}海獺島に回遊したアシカ. くちくまの 70 号.
1987. 盛永俊太郎・安田健編『享保・元文諸国産物帳集成 VI 紀伊』: 「紀州産物帳」「紀州分産物絵図」「紀伊殿分. 紀州勢州産物之内相残絵図」「紀州在田郡広湯浅庄内産物」. 眞砂久哉解題. 科学書院. 955-962.
1987. 『南方熊楠菌誌』第 1 巻. くちくまの 71 号.
1987. 南方熊楠外伝を読んで——宮武省三・里見八犬伝・コノテガシワ. くちくまの 68 号.
1987. 神島の研究と保護の歴史. 関西自然保護協会報 (14): 7-10.
1987. 「セルボーン博物誌」と「南方熊楠菌誌」——書簡形式による博物誌. 土 (103): 44-45.
1988. 南方熊楠再発見. 土 (105): 40-41.
1988. 那智山の南方熊楠. 随筆誌「土」.
1988. 南方熊楠日記に見る博物学から菌類学への軌跡 (1). くちくまの 73 号.

1989. 南方熊楠日記に見る博物学から菌類学への軌跡 (2). くちくまの 77 号.
1989. 南方熊楠日記に見る 20 世紀初頭的那智山附近のシダ植物と種子植物 (遺稿). くろしお (8).

眞砂久哉さんへの追悼記

- 小山周次郎 1989: 弔辞. 脇村奨学会「通信」No. 32: 25.
- 中嶋章和 (他) 1989. 眞砂久哉会長追悼号. 紀州シダの会会報 (15): 1-10.
- 菅井憲一 1990. 南方熊楠をめぐる——故眞砂久哉氏書簡. くちくまの 83 号.
- (木村陽二郎 Yojiro KIMURA)

□チュリア・マハバラートの旅 (その 1)

A Botanical Journey to the Chulia and the Mahabarat Ranges, Central Nepal (1)

私は 1969 年から 2 年間, ネパールの Department of Medicinal Plants にコロンプラン専門家として勤務し, 当局が行う植物調査に参加した. 日本側が企画する植物調査はそれまで 3 度体験しており, 私としては慣れていたつもりであるが, ネパール人の中に一人加わった調査旅行は, それ迄の経験と全く異なるもので, 外側から見て知っていた常識を改めるものだった. 以下に当時日本へ書き送った通信文を集成して, 調査旅行での見聞を記す. もう 20 年も昔のことではあるが, このコースを歩いた人はいないはずであるし, ネパールの現場を理解する一助になるものと思う.

2 月に着任して以来はじめての長期の旅に行ってきた. 長期といっても 10 日間ですがなかなか大変な旅で, いささかアゴを出しかけました. しかしテライからカトマンズまで歩いて入った数すくない日本人の一人になりました. 自動車や飛行機が入るようになってからは, はじめてではないでしょうか.

4 月 17 日 (1969 年) カトマンズからシムラまで飛行機で行きました. シムラはインドとネパールをつなぐ唯一¹⁾のハイウェイ (トリブバンハ